



崔承浩氏（左から7人目）を囲んだ日韓参加者全員集合の写真はソウルで撮影。Zoom（ズーム）を使い日本側参加者をスクリーンに映し出した。（撮影／編集部）

第6回日韓学生フォーラム

コロナ禍、ズームで両会場をつなぐ

韓国の著名なPD、崔承浩氏が語る ジャーナリスト人生

日本と韓国の大学生が交流を通じて互いの国を知る「ジャーナリストを目指す日韓学生フォーラム」の6回目が昨年11月28日に開催された。5回目まではソウル、広島、光州、沖縄、九州などを一緒に訪れていたが、新型コロナウイルスが猛威を振るう中、今回はソウルと東京の会場をZoom（ズーム）でつないだ。

韓国言論人の権力との闘いを描いた映画『共犯者たち』などの製作で知られる独立メディア『ニュース打破』プロデューサー、崔承浩氏がジャーナリストになったきっかけや仕事、保守政権との闘いなどについて語った。

学生らは事前に崔氏の二つの作品『共犯者たち』と『スパイネーション／自白』を鑑賞し、この日に臨んだ。

今回も、4月から記者として働く学生が記事を執筆した。

韓国の参加者を代表して、韓国カトリック大学の李悞暇さんが感想を寄せた。

クレジットのない写真撮影／久里聡（千葉大学）

原動力は「世の中のことが知りたい」

真実を追い求め、批判対象者の考え把握して反映

高校3年生の時、朴正熙大統領が暗殺されたニュースを聞いて、この世の終わりではないかと本気で心配しました。当時は朴大統領の時代がずっと続くと思っていたからです。ところが、大学に進学して仲良くなった演劇部の先輩は、暗殺の翌日に居酒屋のドアに鍵を掛けて祝杯を挙げたと話していました。とても驚きました。大学に入って初めて、自分が独裁政権下の教育で洗脳されていたことに気が付いたのです。

大学入学直後の1980年5月、民主化を求めた多くの市民が軍の発砲で殺害された「光州事件」が起きました。私は何もできませんでしたが、この時に「社会に役立つ人間になりたい。二度とこのようなことが起きないようにしたい」と思いました。

軍隊を除隊した後、プロデューサー（PD）としてMBC（韓国文化放送）に入社しました。演劇部出身だったのでドラマをやりたいと思っていましたが、研修でドキュメンタリーや情報番組を作る経験をして、教養番組のPDに志望を変えました。ドラマの現場で

は、役者やスタッフなど限られた人にしか会えない。でも教養番組のPDならば会いたい人に会い、行きたいところに行けると思いました。「世の中のことを知りたい」。それが私にとって最も重要な思いであり、30年余りの間、番組を作り続けることができた原動力です。

最も愛する番組「PD手帳」

教養番組のアシスタントを4年ほど務めた後、本格的なPDとな

韓国・ソウルの会場で、ジャーナリストとしての体験を語る崔承浩氏。（撮影／編集部）

りました。ドラマ仕立ての番組などを制作した後、最も愛する番組「PD手帳」を手掛けることになりました。

この番組は非常に大変です。不正を暴く番組ですから、取材を嫌がる人たちに会いに行かなければなりません。ストレスが非常にたまるので、PDの間では人気がありませんでしたが、私ほどにかく携わり続けたいと思いました。韓国の社会問題に直面し、解決方法を考えようとするからです。番組制作で問題解決に至ると大きな喜びを感じます。

番組制作には、自分なりの原則が二つありました。一つは真実を追い求めること。取材時に最も注意すべきは、自分の望む方向に合わせる事実をねじ曲げてしまわないようにすることです。取材テーマを決める時には何らかの問題意識がありますが、現実には予想よりもはるかに複雑です。いざ現場に出ると、自分の認識とは異なる事実が数多く直面します。現実を無視して問題意識に沿った番組を作っただけではありません。

もう一つは、批判を受ける対象者の考え方や立場をしっかり把握して番組に反映させることです。相手の立場を知ってこそ、正しい解決につながるかと考えるからで



チェ スンホ・プロデューサー（PD）、映画監督。
1961年生まれ。86年にMBC入社。教養番組のPDとして「警察庁の人々」「三金時代」などを制作。95年から時事番組「PD手帳」で「黄禹錫教授のES細胞論文捏造事件」や「主要4河川事業」などを報道する。政権による人事介入を機にストライキに参加し、2012年1月にMBCを不当解雇。13年から独立メディア『ニュース打破』で活動し、ドキュメンタリー映画『スパイネーション／自白』（16）、『共犯者たち』（17）を製作。17年にMBC社長に就任し、不当解雇者の復職などに取り組んだ。20年4月からPDとして『ニュース打破』に復帰した。

崔承浩PDの作品

映画『スパイネーション／自白』

韓国では2016年10月に公開。テロやスパイ行為を取り締まる韓国の国家情報院による証拠捏造に迫るドキュメンタリー。北朝鮮のスパイとして拘束された脱北者の女性の証言を基に、日本にも足を運んで取材を重ねた。

映画『共犯者たち』

韓国では2017年に公開。08年に発足した李明博政権から朴槿恵政権に至る言論弾圧の内幕を、監督自らの経験を基に描いた。メディアに圧力を掛ける政権と、迎合する放送局幹部にカメラを向け、報道の自由を奪おうとした主犯と「共犯者たち」を浮かび上がらせる。



す。若い時は正義感のほうに前に出ていましたが、ただ「悪い」と糾弾すること、その行動の背景に言及することには大きな違いがあります。できるだけ直接会って、その人の考えを番組に反映してきました。問題点を分析し冷静に批判することで、視聴者にもより豊かな判断材料を伝えることができます。

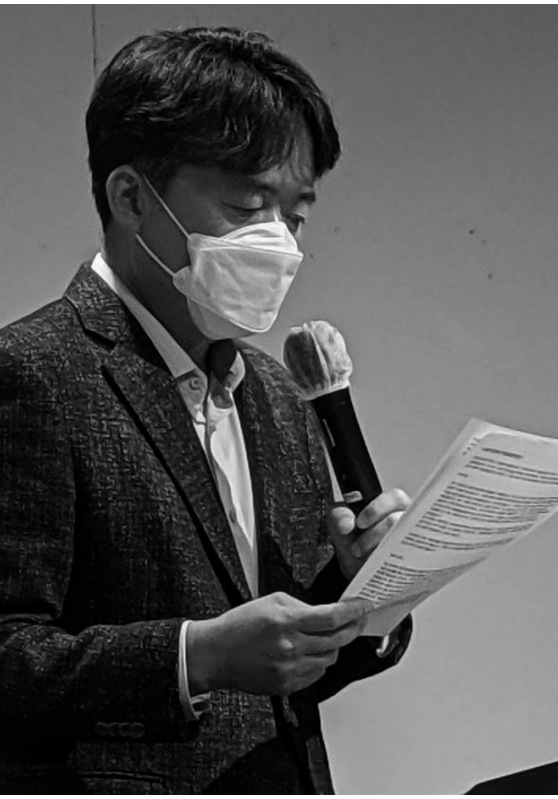
相手の考えや立場を把握するよ
うに気を付けると、訴えられるこ
とも減ります。多くの人は自分の
行ないの善悪を知っているので、
その程度に合った批判であれば、
訴訟の可能性は低くなります。「過
大な非難を受けた」と感じたら、
人は負けるとわかっていても訴訟
を選択するでしょう。

敏感なテーマの取材を繰り返して
きましたが、番組が訴えられた

ことは2回しかありません。どち
らも相手は宗教団体でした。宗教
団体は、自分たちが正しいと信徒
に証明しなければいけないので、
決して間違いを認めないのです
ね。「純福音協会」という韓国最大
の宗教法人を批判した時、信徒た
ちは「もうMBCを見るのはやめ
よう」というシールを車に貼り、
ソウル市内を走り回っていました。

黄教授の論文捏造事件 を放送

「PD手帳」を作りながら、労働
組合でも活動しました。さまざま
なストライキを行ないましたが、
賃上げを求めて声を上げたのでは
なく、ほとんどが自社の報道を威
圧しようとする会社の圧力をはね
のけるためでした。



コロナ禍でマスクをして話す崔承浩氏。(撮影／編集部)

日韓フォーラムに参加した学生は、崔承浩監督のドキュメンタ
リー映画2本を事前に鑑賞していた。日本側は韓国語で、韓国
側は日本語で画用紙にメッセージを書き、カメラに掲げて順番
に1分間ずつスピーチした。印象に残った日本側の2人の発言
を紹介する。

「社会のリアル」

上智大学2年 菅野史紗

ただ出来事を追っただけ、政
府の発表をそのまま報じるだ
けでは、社会のリアルにつな
がらない。カメラを止めない
姿勢が、死角となっている「社
会のリアル」の追求につなが
ると感じた。そのような報道
記者を目指したい。

「権力監視の不在と不可能」

国際基督教大学3年 遠藤大樹

誰でも自分の生活があり仕
事がある。だからこそメデイ
アが存在がなければ、誰も権
力監視をしなくなってしまう
。記者が持つ職業の責任を
感じた。その覚悟を肝に銘じ
て、健全な言論空間を作るこ
とができる記者になりたい。



日本人学生は韓国語、韓国学生は日本語でそれぞれ画用紙にメッセージを書いた。

『PD手帳』の司会者と編集長を
兼任していた2005年、黄禹
錫教授の論文捏造事件を取り上げ
ました。11個のES細胞を作った
という論文を世界的な科学誌『サ
イエンス』に発表し、国民に絶大
な人気を誇っていた人物です。そ
の教授が論文を捏造していたとい
う情報が入ったので、5人のPD
と5カ月間調査して、ついに証拠
や証言を手に入れました。

送を一時断念しましたが、新聞報
道なども追い風になり、最後には
番組を放送することができまし
た。その後は世論が一変し、最終
的には最高裁が教授に有罪判決を
下しました。
報道を受け入れてもらうには、
正しい取材方法が必要だと思い知
ったので、08年に米国の調査報道
記者・編集者協会（IRE）で1
年間研修を受け、データジャーナ
リズムを学びました。調査報道に
関する世界トップレベルの教育機
関です。帰国後は1人のPDとし
て、現場に戻りました。番組の編
集長が現場に戻ることは過去に例
がなかったのですが、それほど取
材が好きだったのです。

その後は、韓国の検察の問題点を暴いた番組「検事とスポンサー」を制作しました。建設業者が数十人の検事を高級クラブで接待し、売春まで行なわれていた事件です。複数の検事が辞職し、放送を機に検事たちは高級クラブに行く回数が減ったそうです（笑）。

李明博政権当時の政策の目玉だった四大河川事業にも取り組みました。船で貨物を運べるように運河を建設すれば、物流コストの削減を図ることができるという触れ込みでしたが、海に囲まれている韓国で運河が必要でしょうか。大統領は世論の反対を受け、水質

改善と洪水予防に目的を変えました。とにかく運河を建設するのが目的なのです。

そこで「PD手帳」で、四大河川事業を批判する番組を作りました。ところが、当時のMBC社長は事前に放送内容の確認を要求し、私が要求を拒むと番組を放送しないと言ったのです。市民による抗議活動もあって放送はされましたが、私は数カ月後に「PD手帳」から外されました。労働組合は170日間のストライキをしました。私が私を含めて6人が解雇され、私はストを主導した容疑で逮捕されました。数年後に解雇無効の判

決を勝ち取り、背景に政権による弾圧があったことが明らかになったのです。

スパイ捏造事件に 取り組む

2013年から『ニュース打破』で働き始めました。解雇されたメディア関係者が集まり、市民の寄付などで運営するメディアです。現在3万4000人余りの後援者がいます（昨年12月時点のYouTubeチャンネル登録者は60万人以上）。ここで最初に作った番組で、四大河川事業を取り上げました。李明博大統領に、「水深6mは大統

領ご自身の指示ですね」と直接質問しましたが、これは私がMBCから離れていたからこそ、可能だったことです。既存メディアでは、大統領への直接質問はできない慣例になっているからです。大統領に直接質問したのは、運河を作る具体的な指示を出したのではないかと確認する意図がありました。現在の文在寅政権下の監査で、後に事実と確認できました。

その後、映画『スパイネーション/自白』で取り上げた国家情報院によるスパイ捏造事件に取り組みました。国の情報機関への取材は非常に微妙で、既存の放送局で取り扱うのは難しいテーマですが、『ニュース打破』にいたからこそ可能でした。裁判の取材で捏造を確認することから始まり、最終的には「対共捜査権」というスパイを捕まえる権限を、国情院が警察に引き渡すことになりました。『自白』を公開した直後に、李明博政権を引き継いだ朴槿恵大統領（当時）が退陣に至るきっかけとなった一連の報道が始まりました。ただ、大統領が退いたとしても、任期が残る放送局の社長らによつて言論弾圧は続くかもしれせん。それが懸念材料としてあったので、『共犯者たち』を作ることになりました。映画の公開は、公営放送のKBSとMBCの労働組合

記者の卵が目指すもの

西南学院大学 4年 中田大貴

日本側では、来春から新聞記者や放送局のディレクターになる学生有志5人が、ネットメディアの現状を伝える映像リポートを制作し上映した。韓国ではネットメディアで情報を得る人が、新聞やテレビと比べて圧倒的だといふ。日本の実態を調べてみようという、まずは渋谷の街頭で10〜20代の若者にインタビューを試みた。

4日間で答えてくれたのは64人。情報を得る手段を尋ねたところ、54人がネット、10人がテレビで、新聞と答えた人は1人もいなかった。『ネッ

トは無料で見られるから』『ネットには多様な意見が載る。新聞やテレビに比べて中立的だ』という意見も聞かれた。新聞やテレビの存在感がなくなり、信頼度も低下していることを実感した。

ネットメディアにも直接取材した。街頭インタビューで若者に最も知られていたのは、5年前に開設され、報道に力を入れている印象がある『BuzzFeed Japan』。ニュース部門編集長の貴洞欣寛さんによると、情報を求める若い世代の「入り口」になることを意識しているという。新聞など既存メディアが役割を果たせていないと感じる部分だと教えてくれた。

学術会議の任命拒否問題などの討論会をYouTube上で公開している『Choose Life Project』は、代表の佐治洋さんがテレビ制作会社出身。視聴率に左右され、問題



フォーラムで発表する動画を制作した学生たち。

提起型の番組作りがしばらく続いたことに疑問を抱いて活動を始めたという。

ネットメディアの取材を通じて、既存メディアと変わらないものも見えてきた。『ファクト』を伝えるという精神だ。貫洞さんにも佐治さんにも、ジャーナリストとしてやるべきことは変わらないという自負をひしひしと感じた。

なぜ報道という職業を目指したのか。その原点は誰かの役に立つ情報を伝えたいという素朴な思いだった。届けるべき情報を届け、読者が他人事ではなく「自分事」と思える記事を書く。来年から現場に出る私たちは、そのような記者になりたいと思う。



韓国で講演する崔承浩氏の話スクリーン越しに聞く日本の参加者。

人々がメディアの民主化闘争を応援してくれるようになりました。

KBSとMBCの社長が退任した後、MBCの社長に就任しました。言論闘争の象徴と見られていたので、会社が変わったことをアピールするためにも、自分が改革を指揮する必要があると考えたのです。ただ、2年の任期が終わる時には、社長を続けるかどうか悩んだ末に『ニュース打破』の現場に戻ることにしました。運転手付きの車に乗るよりも、三脚を担いで現場を飛び回るほうが幸せだと思います。

がストを行なう時期に合わせました。ストの必要性や放送の主体性回復の重要性を市民に説明する良い手段だと考えたからです。観客数はドキュメンタリー映画としては異例の26万人を記録し、それまで放送局や関係者を批判していた

今ほとども満足しています。『ニュース打破』では、四大河川事業の取材を続けています。政権が代わっても、ダム事業など過去の残滓はまだ残っているからです。問題点を掘り起こして、韓国人々のために結果を出していきたいと考えています。

崔PDと学生の質疑応答から

「抱擁するジャーナリズム」を目指したい

——現実を無視して自分の問題意識に沿った番組を作ってしまった経験はありませんか。

在韓米軍基地があった村での売買春を取り上げた番組です。最初は、女性を農場に閉じ込めて働か

せているかのように米国メディアが報道し、基地周辺の住民が反発していたため、米国の報道を批判する立場から番組を作りました。米メディアの報道に誇張があったのも事実ですが、実際にフィリピンやロシアから来た女性がセックスワークをしていた事実が後にな



「韓国レガシーメディアの方向性」と題して発表。(提供/李僕暇)

学業と両立しながら発表の準備

昨年1月から2月にかけて九州で開催された第5回韓日学生フォーラムに参加した。その後、ソウルで開催されることを期待したが、新型コロナの影響で交流の中断を余儀なくされた。

今回のフォーラムは、韓国と日本の会場をZoom（ズーム）でつないで行なわれた。これまで経験したことがなかったので、準備が大変だった。私は宣伝ポスター作りに始まり、参加者募集などの準備に携わった。しかも、学生同士の交流が中心となった1部では、韓国側を代表して「レガシーメディア（注）の方向性」と題し、韓国メディアの現状などについて発表した。

学業と両立しながら準備に追われる私を見て、友人たちは「大変だね」と声をかけてくれたが、私は韓日フォーラムの「ファン」だったので、全く大変とは思わなかった。むしろうれしかった。特に『ニュース打破』のプロデューサー、崔承浩さんの前で発表できると思うとワクワクした。

日本の友人たちに生き生きとした韓国のメディア状況を伝えたいと思い、若者たちに直接インタビューした映像を発表データに取り入れた。大学から戻って夜に作業をしたので、編集には4日ほどかかった。こんなに時間がかかるとは思いませんでしたが、良い経験になった。

コロナが収まり、日本の友人たちと直接会って交流できる日が来ることを切に願っている。

(注) テレビ（地上波、ケーブル）、ラジオ、新聞などの伝統メディア。

李僕暇（イ ソラ）・韓国カトリック大学学生。

※原文韓国語。翻訳/文聖姫・編集部。

自尊心から番組を作ってしまったのではないかと後悔しました。

——最近のメディアは、視聴者の興味に合わせて報道することが増えている気がします。

視聴者は自分にとって都合のよいニュースを好む傾向があります。ただ、それでは社会の分断が進みますし、反対側の立場の意見を聞き入れることも必要です。もちろん、ユダヤ人の大量虐殺や気候変動を否定するような極端な意見は別です。対立する主張の中で、

何が問題なのかを見極め、市民が判断する機会を提供するべきでしょう。特定の人々が望むものを提供する傾向が強くなれば、社会の合意形成が難しくなってしまうと思います。民主主義が破綻しないよう、「抱擁するジャーナリズム」を目指したいと思います。

——日韓関係の報道では両国とも過激な見出しが目につき、互いに好意的な報道をしているとは思えません。負のスパイラルを止めるために何ができるでしょうか。

ジャーナリストを目指す皆さんが集まっているこの場合は、まさにお互いの国を理解し、よりよい関係を築いていくためにあると思っています。植村隆さんが日本で受けた言論弾圧も、韓国への偏った感情や誤解に起因すると感じています。韓国も日本への感情的な対応が目立ちます。両国の政治家によって増幅される側面もあります。安倍晋三前首相は、植村さんの裁判の結果についてSNSに誤

った書き込みをしました。事実を歪曲して自らの政治的な立場を強めようとする典型的な試みだと思っています。韓国にも同じような政治家がいて、日韓関係を悪化させる要因となっています。一方で、市民は互いを理解し違いを認めて克服する努力を続けるべきです。ジャーナリストも憎悪を煽る報道ではなく、理解を促進できるような報道を心掛けるべきでしょう。私はこれまで、日韓関



東京の会場風景。

係を扱う番組を作つてこなかったの、機会があれば関係改善に役立つようなドキュメンタリー番組を作りたいです。日本と韓国は最も近い隣国です。今はコロナ禍で行き来が難しい状況ですが、両国には隣国との交流を望んでいる人がたくさんいると思います。両国の未来のために、関係改善の努力を続けていくべきです。まとめ/日本側の参加学生、構成/新崎盛吾。

学生たちは何を感じたのか？

権力対峙と対照的な謙虚な姿勢

早稲田大学 江浪有紀

映画の中で李明博元大統領に食いついて質問する姿は、まさにジャーナリストの鑑だった。「真実を追い求める」と何度も繰り返した崔さん。不当解雇や弾圧に負けず、信念を貫き通した人の言葉には重みがあった。自分にもできるのかと自問しながら、その言葉をしっかりと胸に刻んだ。

印象的だったのは、権力者と厳しく対峙する姿とは対照的に、学生や質問に真摯に答える姿勢だ。映画の感想を述べた学生のスピーチの内容も、ずっとメモしていたという。その謙虚さこそ、崔さんの報道が支持される理由だと感じた。ジャー

心に刻む報じるというの難しさ

千葉大学 久里聡

ナリズムは市民の信頼の上に成り立つことを改めて実感した。崔さんは「報道を目指す若者の姿に希望を持った」と、エールを贈ってくれた。その期待に応えられるよう、初心を忘れずに新人記者として、しっかりと社会と向き合いたい。

「自分が信じていた世界は本物ではなかった」。崔さんの講演は、朴正熙大統領の訃報に祝杯を挙げた演劇部の先輩たちとの出会いから始まった。それまで疑いもなかった現実が音を立てて崩れるさまが目に見え、一気に話に引き込まれた。初めて現実に疑問を抱いた大学一年

生の時の思いが、ジャーナリストとしての原点なのだろう。

取材対象者にマイクを突きつけ、カメラを回し続ける姿を映画の中で何度も目にした。相手は何も話さなかったが、映像からは伝わるものがあつた。質問は回答を得るための手段ではない。直接取材の重要性を実感した。

「現実はずれよりもはるかに複雑。自分の考えで事実を歪めれば問題解決は困難になる」との言葉にも衝撃を受けた。社会を良くしたいと願った報道が、事態の悪化を招くこともあるのだろう。客観的に報じることの難しさも深く心に刻んだ。

挑み続ける姿勢を忘れずに

神田外語大学 福田愛佳

会社を解雇されても政権の圧力に臆することなく、新たな立

ち位置から報道に取り組む。まさに不屈のジャーナリストだ。「結果が出るまで続けなければならぬ」との言葉に、真実を伝える熱意を感じた。

同性愛者の友人が受けたぞんざいな扱いに憤りを感じ、多様性を通じる社会を目指そうと、記者を志したはずだった。しかしコロナ禍で社会と交わる機会が減ったためか、就職活動が始まったにもかかわらず、なんとなく時間が過ぎていた。崔さんの不屈の姿勢に触れたことで、いつの間にか忘れていた熱意が再びわき上がるのを感じた。

コロナ禍での就職活動には不安も大きいですが、不屈の姿勢を忘れずに、結果が出るまでしっかりと挑み続けていこうと思う。

記者を志した思いを持ち続ける

慶應義塾大学 窪田湧亮

記者を志した思いを一貫して持ち続けることが、今後の私にとって必要なことだと思ふ。疲れた時やくじけそうになった時には、原点に戻って講演のメモを読み返したい。

「記者の勇氣に拍手」「ジャーナリズムに感謝。崔さんの映画を観た韓国の大学生の感想だ。日本ではあまり聞くことのない報道への感謝の言葉に、崔さんの仕事ぶりへの評価を実感した。

権力者だけではなく、会社の上司にも妥協せずに取材し質問をぶつける。来年から記者として働く自分に同じことができる自信はない。だからこそ「少しでも社会のことを知りたかった」という記者を目指した動機を聞いて驚いた。多くの人と話して視野を広げたという私の動機とも、重なるところがあつたからだ。崔さんも、かつては同じ学生だったのだ。

記者を志した思いを一貫して持ち続けることが、今後の私にとって必要なことだと思ふ。疲れた時やくじけそうになった時には、原点に戻って講演のメモを読み返したい。